



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

# 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

## 第4期 滑川町教育振興基本計画に基づき教育を進めてまいります。

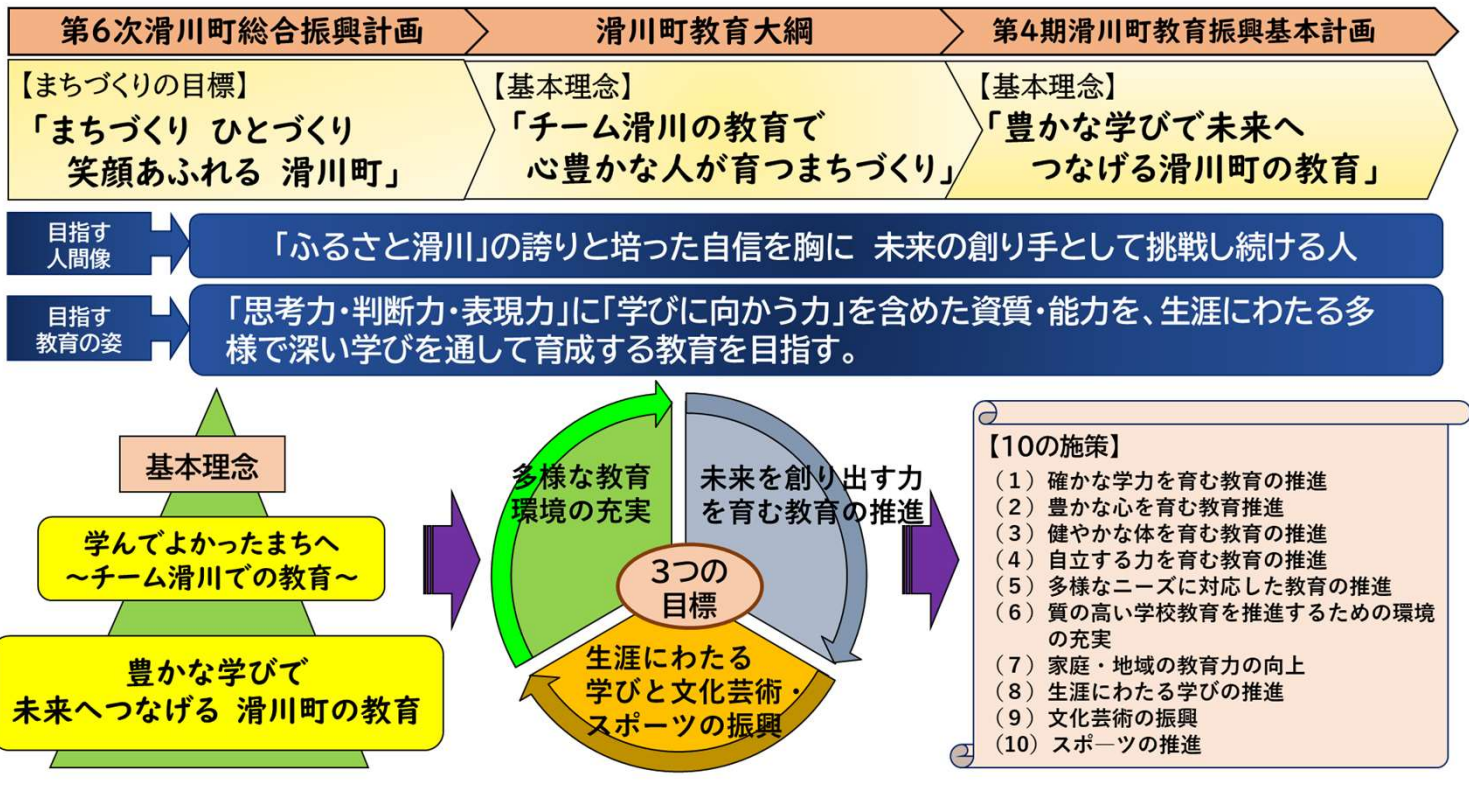
本計画で掲げている基本理念「豊かな学びで 未来へつなげる 滑川町の教育」は、まちづくりの目標「まちづくり ひとつづくり 笑顔あふれる 滑川町」を踏まえ、「学んでよかったまちへ -チーム滑川での教育-」を推進するものです。

町内全域に点在する、町の暮らしを長く支えてきた沼（農業用ため池）は、地域に受け継がれてきた古き良きものと新しい知恵と技術とが調和し、それが町や町の人々にとってなくてはならないものとなっています。本計画の理念は、この沼のように滑川町への誇りと愛着を町民の心にしみ込ませるとともに、「ふるさと滑川」で育んだ学びと培った自信を胸に、未来の創り手として挑戦し続ける人材を育成することを示しております。

予測困難な時代だからこそ、人材の育成が重要であり、その人材の英知を結集し、更なる人づくり、地域づくりをしていかなければなりません。

「町の子は町で育てる」を合言葉に、滑川町での学校教育や社会教育により育成された人材が、未来の社会を構成することで、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会の持続的な成長・発展に結び付くものとなるよう注力していきます。

### 第4期滑川町教育振興基本計画(概要版) 2026年度～2030年度 令和8年3月策定



# 我ら拓かん 世界は広し ～佐佐木信綱からのメッセージ～

滑川中学校 校歌

作詞 佐佐木信綱  
作曲 信時潔

一  
手をつなげ  
清き心と  
強い力と協せて進め  
見よ滑川のつづる村々  
ともに栄えゆく豊けき稔り  
我ら拓かん世界は広し

二  
朝あけの窓を開かん  
風も薫れる緑の野辺よ  
身は健やかに学び励めば  
夢も羽ばたく真澄の空へ  
我ら拓かん世界は広し

三  
日々日々に  
思い鎮めて  
見やる二の宮 大立 高根  
いざ遙かなる山のかなたに  
ひろき世界を拓かん我ら  
我ら拓かん世界は広し

4月8日(水)町内の各小中学校では入学式が挙行されました。私は、滑川中学校の入学式に出席しました。式の中で滑川中学校校歌が斉唱されました。改めてよい校歌だと感じました。私自身は、平成20年に滑川中学校に教諭として赴任した際に、この校歌に接することとなりました。始業式で生徒が歌う校歌を聴いて、とても感動したことを今でもはっきりと覚えています。今回は、新しい学年のスタートを迎えるに当たり、滑川中学校校歌に関する私の考察を記したいと思います。

まず、作詞の佐佐木 信綱、作曲の信時 潔について調べました。佐佐木 信綱(1872-1963)は、近代日本の歌人、国文学者であり、万葉集の研究で知られています。信時 潔(1887-1965)は、作曲家、チェロ奏者であり、日本の合唱音楽の基礎を築きました。佐佐木 信綱と信時 潔は、数多くの校歌や団体歌を共作した名コンビです。特に昭和初期から中期にかけて、格調高い歌詞と重厚な旋律で知られる学校歌を全国各地の小・中学校や高校へ提供し、現在も愛唱されています。因みに宮前小学校の校歌もこのコンビによるものです。宮前小校歌は、昭和35年に制定されていますので、その際のご縁で滑川中校歌制作を依頼したものと思われる。

さて、滑川中学校の校歌についてです。昭和29年11月、福田村と宮前村が合併し滑川村が誕生しました。7年5ヶ月後の昭和37年4月、旧福田村の福田中学校と旧宮前村の宮前中学校を統合して滑川中学校が開校しました。統合を機に校歌がつけられました。作詞の佐佐木 信綱は昭和38年に亡くなっていますので、信綱最晩年の作品といえます。開校当初は、名目上の統合であり旧福田中、旧宮前中でそれぞれ授業が行われていました。新校舎への引っ越しは昭和39年の9月でした。この時になって実質的な統合が実現しました。

校歌の1番の歌詞は、学校の成立事情を反映したものとなっています。「手をつなげ」「協わせて進め」ではじまります。福田出身の生徒と宮前出身の生徒が反目することなく、新しい学校で仲良く協力しなさいということでしょう。「見よ滑川のつづる村々」は、かつては両村の村境だった滑川が、両村の綴じ紐になって新しい村をつないでいることを示しています。そして、滑川が村に豊かな稔りをもたらすごとく、若い中学生に「友と共に日本、世界発展の原動力たれ」と説いています。

次に、「ひらかん」という言葉が何度も使われていることが、校歌の大きな特徴となっています。佐佐木 信綱と信時 潔によってつくられた校歌は何曲もありますが、調べた限りでは、同じ動詞を何度も使う例は見当たりませんでした。ひらかんは「ひらかむ」であり「ひらく(開く、拓く、啓くなど)」に意志・推量を表す「む」をつなげた文語的な表現です。滑中の校歌では「ひらこう」という意味で使われています。「ひらく」という動詞には「閉じているものをあける」「幸運になる」「あきらかにする」「解きあかす」「よい方向に向ける」「心を晴れ晴れとした状態にする」など、さまざまな意味があります。「末ひろがり」という表現がありますが、とても縁起のよい言葉だといえます。また、「ひらく」は、学ぶということの意味や意義を表す言葉でもあります。校歌の2番は「朝あけの窓を開かん」ではじまります。「窓」は「心の窓」と表現されるように自分と外界をつなぐものです。このことから、「勇気を出して自らの意志で窓を開け新しいものの見方や考え方を取り入れ世界を広げる」ことを示しています。

昭和37年当時、世界は第二次大戦後の冷戦期の真っ只中にありました。佐佐木 信綱は、未来からの使者である滑中生に「豊かな学びをとおして、未来を切り開いて欲しい」という願いを込めて歌詞を紡いだものと考えられます。現在は、「暴力」「格差」「分断」などと表現されるような新たな危機が生じています。加えて、人工知能をはじめテクノロジーの発達は加速する一方です。アーサー・C・クラーク(1917-2008)は「高度に発達したテクノロジーは魔法と区別がつかない」と語りましたが、生成AIを手にした私達は魔法使いとなったといっても過言ではありません。未来がどのようなものになるのか誰にも予測できませんが、一つだけいえることは「魔法を使う人間が邪悪であったり無能であったりしてはならない」ということです。今こそ、校歌に込められた佐佐木信綱のメッセージを真摯に受け止めなければなりません。「自分をひらく」をキーワードに清き心と強き力を身につけ、共生協働して未来を切りひらきましょう。